日本篆刻家協会ニュースレター　2020.7.15第2号
発行　日本篆刻家協会　会長　尾崎蒼石　理事長　井谷五雲
日本篆刻家協会　563-0032 大阪府池田市石橋2-2-10-203　編集　理事 北田成磊

日篆協報

ご挨拶

理事長　井谷五雲

皆さんいかがお過ごしでしょうか。

沈静化の方向に向かいつつあるように思えた新型コロナウイルスによる肺炎の蔓延が、再燃しつつある昨今です。海外におきましても南北アメリカ大陸の恐ろしい感染状況が連日報道されております。各印社の活動もかなり規制されているのではないかと推察いたします。会員の皆様にはくれぐれも注意していただき、感染予防に努めていただきたいと思います。そして自宅を中心にじっくり腰を据えて、篆刻の実作や研究に精励されることを期待いたします。

さて、古河市の篆刻美術館で例年開催されます「日本篆刻家協会役員展」は六月二十七日に無事スタートいたしました。また日展は例年通りの実施が連絡されてきました。入選めざして力作を制作されますよう、一人でも多くの出品者がありますよう、会員皆様の奮闘を念じ上げます。

第2号をお届けいたします。会員の皆様に本協会の動きを知っていただき、本協会が例年通りの活動が再開できるまでの間、ニュースレターを発行いたします。篆刻活動の一助になれば幸いです。

永阪石埭余聞　二

理事長　井谷五雲

餘延年探訪抄記

「石埭翁は酒を飲んだか？」今のところ私の結論は―石埭翁はよく飲んだ―ということになっている。**などといささか不謹慎なことを先号で書いた。**「石埭翁を知るということは封建社会を脱して、近代化に突き進んでいく時代の、日本の芸術文化を知ることにもなる。」と偉そうなことも書いた。少々反省している。

石埭翁の自用印三百顆を整理する中で、餘延年の刻石を発見した（写真）。先号では呉昌碩刻印二顆を紹介したが、それは石埭翁のために刻したもの。餘延年は江戸文政二年（一八一九）、石埭翁が生まれる二十六年前に亡くなっているので、事情は呉昌碩のそれとは違う。石埭翁が何らかの形で手に入れ、大切にしていたのであろう。残念ながら石埭翁の書画作品にそれが使用されたものは、管見ながら未だ見ないでいる。

餘延年

江戸延享三年（一七四六）、尾張の国知多郡八ツ屋新田（現、愛知県大府市共和町）に生まれた。また先祖代々大高村（現、名古屋市緑区大高町）に住んだともいう。本姓は山口氏、通称は九郎左衛門。百済の餘璋王の後裔であることから餘と称した。字は千秋または君壽、号は墨山・魯臺・風塵道人等がある。造り酒屋を営み、長じて篆刻に志し、当時京都に居た高芙蓉に師事した。左大臣二条斉信に印を納め、成修処士の号を賜った。石印は当然のことながら、鋳造印にも長け、当時はその名手を謳われた。また俳句を久村暁台に、墨蘭を増山雪齋に学び、焼き物も技量優れ、地元大高焼に関わった。印譜に『印鐫』『宣和集古印史』（摸刻）がある。また随筆集には『風塵随筆』がある。文政二年（一八一九）病没、七十四歳。

簡単にそのプロフィールを示したが、延年は様々な芸術分野にその才能を示した。篆刻は京都に居た高芙蓉の門人としておよそ二十年くらいは師事したであろうと思われる。芙蓉門の高足である曾之唯・葛子琴・源具選等とはもちろん、池大雅・韓天壽・与謝蕪村・谷文晁・木村巽齋等当時の錚々たる文人墨客と交わっている。尾張に居て、京都に悠々と遊学できたのは、山口家が伝世の造り酒屋を営んでいたからであろう。安永四年（一七七五）三十歳の時に家業を継いだが「うちには、真面目で金仏の番頭がござるで……」としばしば口にしていたと伝えられる。

特筆すべきは師の高芙蓉の葬儀一切を取り仕切ったことであろう。ここでは詳しく述べる紙数がないので略述するが、天明三年（一七八三）、師の高芙蓉が水戸藩宍戸侯に招聘されて東下することになり、延年もまたそれに従い東下した。六十三歳の高齢に達していた師の身辺に寄り添って、体調すぐれぬ師を何くれとなく世話をした。高芙蓉は江戸に到着して間もなく他界し、遺骸は小石川無量院に葬られた。時に延年は三十九歳の若さであった。印聖と仰がれた高芙蓉の葬儀一切を取り仕切ったのであるから、その名はいやが上にも高くなったに違いない。そして延年は尾張に帰った。

石埭翁は延年と同郷と言ってよく、その優れて輝く同郷先人の数少ない刻印を手に入れて大いに喜んだことであろう。

さて造り酒屋を営んで、その財力で芸術全般に才能を発揮した餘延年は文政二年（一八一九）四月十九日に七十四歳で没した。遺体は大高の春江院に葬られた。延年は山口家のいわば中興の祖として尊敬を集めたからであろう、その墓石も立派なものである。大石を一段高く卓立させ、他字数の銘文が墓誌として彫られた。その末尾に「孝孫、孫六郎永年謹誌」と記されている。この孫六郎永年なる人物は二十四歳の若さで他界しているが、延年の長男である耕軒の息で、延年の孫である。掲載の石埭翁所持する延年刻印「鳥獣不可與同群」の側面に刻された款「墨山翁延年篆刻、永年観」を記したまさにその人である。延年にとって我が孫、しかも長男の息である孫六郎は可愛さ一入であったに違いないが、二十四歳という若さでこの世を去った。しかし、幸いなことに延年は先に他界しており、この悲しみを知らずに永眠したことはせめてものことであった。

先日、私は門人と春江院にある墓石を見るべく出かけた。突然に、しかも何の連絡もせずに訪れたのだが、住職は洵に丁寧に応対して下さった。現存する山口家に連絡をされ、その墓石を拝観することの快諾を得て、我々をその墓所まで案内して下さった。そして「餘延年さんは」といかにも親しげに色々とお話をして下さった。帰路、住職の話に従って大高城址に上って往時を偲び、城下に下って狭い矩形の道を歩き、百年前の町並みを楽しんだ。むしろこちらが主目的であったか？最後に造り酒屋を訪ねた。

酒蔵のある街並みとして、訪れる人も多いようだが、その造り酒屋も今は三軒のみ。平日の昼はひっそりと静まりかえっていた。〝株式会社萬乗酒造〟〝山盛酒造株式会社〟〝神の井酒造株式会社〟の三つである。私は神の井酒造の黒い板塀に続く入り口の引き戸を開けて店内に入った。古式床しい構えである。店番はここの御主人であろうか、ひとしきりお酒の話や大高の町の話をして店を出た。いや、もちろん土産に一本買ったのは当然。この時期には珍しい原酒の生酒があるということなので。保冷剤で丁寧に包んでいただき、早速その夜にいただいた。もちろん旨い。二十度もあるこの銘酒の味は大高の人の純朴さや親切さを思い出させ、延年の芸術を考えさせ、ひいては石埭翁の縁をも思わせて、更に旨かった。

◀春江院の餘延年墓「墨山道翰信士墓」

◀大高の造り酒屋

文房古玩「白磁の文房具」

《その一・印盒》

副理事長　酒居石荘

わが師梅舒適先生の燕喜室の中国書画をはじめ近現代の中国の刻印、印譜、漢籍や文房四宝の厖大なコレクションは並大抵のものではない。日本篆刻展特別展観で、また研究会等で先生のお話を聞きながら現物を間近に直接見て、勉強させていただいたことが思い出される。先生は「篆刻をするには、字を書いたり画を描いたり、総合的に勉強しなければならない。」と常々申され、コレクションを我々の勉強のために公開してくださった。篆刻だけでなく周辺の教養を高めていただくきっかけの一助になればと、文房具をとりあげ思いつくまま紹介する。

文房とは、古くは「文詞を司る職名」であったが、唐代ころから「読書をする部屋」今でいう書斎の意に変化していった。宋時代から文人の文房生活に関する基本的在り方に関心が高まり、文人は書斎を完備する風習が生まれた。明末になると、書斎における書家の必需品を文具と称し、文房具と呼称した。古来書斎を意味していたものが、後に、用具をも総括して指すように変化したと考えられる。現在でいうノートや鉛筆などの文具品とは区別する必要があり、書における「文房具」とは、美術品として鑑賞に堪えうる書道用具、またこれに準ずるものを指している。

文房具といえば、「文房四宝」と言われる筆、墨、紙、硯があげられる。「文房四宝」や「石印材」を説いた書籍は多くあるが、それ以外にも文人の書斎に欠かせない各種文具があり、それらについて著された書籍は少ない。この稿では文房諸具といわれる、印盒、注水具、筆筒、筆架、硯屏、墨牀等を紹介する。

私が文房古玩に興味を持ったのは、講師として出講されていた梅先生の授業の後、奈良市内の骨董店巡りにお供し、梅先生を通じていろいろな骨董に触れ、古玩の世界を知ったことから始まる。しかし、大学生であった当時は見るだけであった。一〇年ほどのち、一九七七年日中文化交流協会が派遣した「日本書道家訪中参観団」に、かけだしの私は梅団長の随行として初めて中国を訪れた。日中国交回復直後で制限も多く、香港経由で深圳から入境し、広州、西安、洛陽、北京を訪ね、「四人組」追放直後の当時の中国の事情を反映した緊張感の強い窮屈な旅行だったの印象が強い。しかし、文化大革命の影響か、文物商店には古玩品があふれていた。白磁の魅力に惹かれたのは、この時北京琉璃廠の景雲堂で出会った「白磁印盒」が始まりだった。この白磁印盒との出会いがその後の二〇数回の訪中では、テーマを「白磁」に絞りこみ文物商店めぐりを楽しみにすることとなった。

印盒とは、印泥を入れる器。印泥の油を吸収しない材質のものが適する。釉薬のかかった陶磁器をはじめ漆器、玉器、七宝、金属（錆止め）、木器・竹器（内部を漆塗りし油の滲出防止）等々種々の材料で作られてきた。形は円形が多く大小、深浅様々あり、方形、変形のものもある。

◀きっかけとなった白磁印盒（右上）とその他の収蔵品

人はいつ頃から立たされたか

副理事長　小朴圃

中国の官吏登用制度試験即ち科挙の謂は宋代に始まるらしいが、その制度は隋代に定まり、その前の時代には萌芽が見られた。北周を経てやがて隋に統一される北斉の時代のこと、隋書・礼儀志にこんな記述がある。「字有脱誤者、呼起席后立。書迹濫劣者、飲墨水一升。文理孟浪无可取者、奪容刀及席。」村上哲見著「科挙の話」によると、北斉の軍人皇帝高氏は文事を好み、天子みずから試験場に臨み、そこでこの語がある。

字に脱語ある者は呼びて席後に起立せしめ、
書の濫劣なる者有れば墨水一升を飲ましめ、
文理孟浪なる者は席を奪い容刀を脱せしむ。

つまりできの悪い者は、立たせる、墨を飲ませる、しきものや佩刀を取り上げるなどの罰を加えてはずかしめた。文事を好むといっても根が軍人皇帝であるだけにやることが強烈である。いずれにせよこの光景は、天子みずからが張りきって人材の抜擢に乗り出したことを示している、と。

さて掲出の缶翁刻「且飲墨瀋一升」（まさに墨瀋〈墨汁〉一升を飲まんとす）この印を書画の作品に遊印として使うと、この作品は墨汁一升ほど飲まされる程の拙作です、という意味となる。それにしても墨汁一升とは、つくづく今の世で良かったと。酒一升なら飲んでもよいと誰かの声が聞こえてきそうだが、款を読むと閔泳翊のために刻したものと判るが、朝鮮から逃れて上海に寓居していた氏、この印を掌にして墨ならむ酒盃を同好の志と交しただろうと想像してみるのも又悪くはない。

▶呉昌碩刻「且飲墨瀋一升」（款曰：己酉冬日刻寄雲楣老缶）

『篆刻入門書』

代表理事　黒田玉洲

書画篆刻に限らず古来習い事の類は「自己流」から始まるものが普通だと思ってきた。ただ篆刻をやりたいと一大決心だけで、「白文って？」「朱文って？」「印泥って何？」と基本的知識すら持ち合わせずに飛び込んで来られても、その勇気と度胸への称賛は惜しまないがほとほと困ってしまう。やりたければ自ら勉強する方法はいくらでもある。

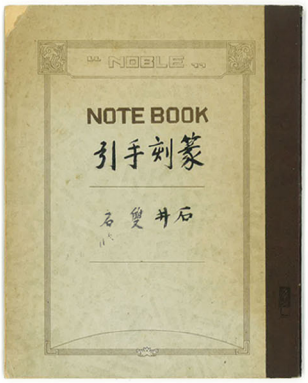
今の時代、ちょっとパソコンをたたけばいろんな〝作家〟がホームページで紹介してくれているが、中国でも日本でも篆刻の入門書は昔から様々出版されている。篆刻思源(圓山応挙)、篆刻鍼度(近藤元粹)、篆刻指南(石井雙石)、印章備正(山田寒山)、篆刻三法(楠瀬日年)、篆刻秘蘊(楠瀬日年)、篆刻独学(安田竹谷)、篆刻入門(関野香雲)、古今印令(寸斎曾隼)、十二刀法詳説(楳山二邨公忠)、近年では篆刻まるわかりハンドブック(河野隆)、超かんたん篆刻(真鍋井蛙)、おもしろ実用てんこく術(岡野楠亭)等々枚挙に暇がない。

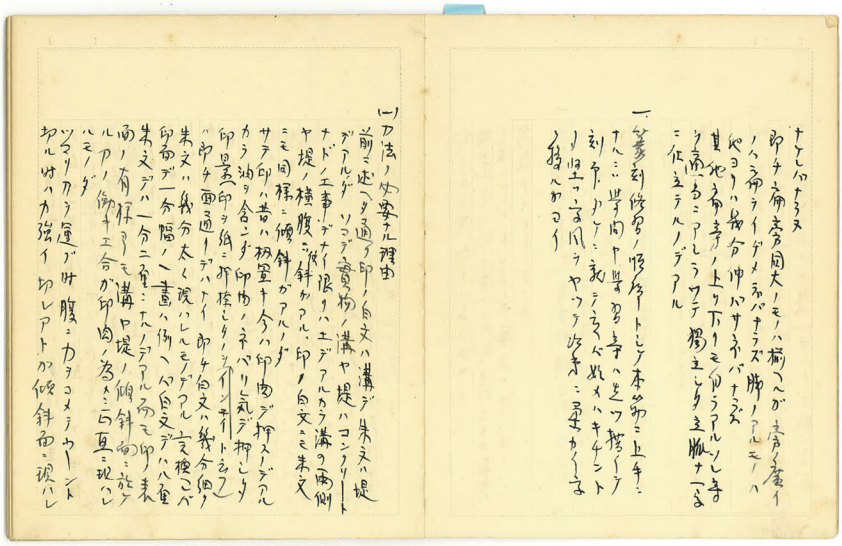
入門書であるからして実作の手順等については読むだけで十分理解ができ、基礎知識と理論は身につく。あくまでも知識・理論であって実作は別問題である。ベテランといわれる人でも迷うのは「章法」と「刀法」の二法の理論である。その詳細については第十一回中央研究会の井谷理事長、喜多副理事長の講義資料参照。そこで章法の項目ごとに、各出版物を簡単に比較検討してみた。

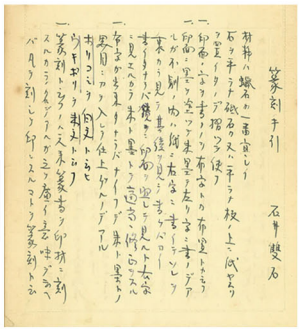
石井雙石翁が「篆刻手引」の原稿を自筆で書いている大学ノートが手元にある。未完成の原稿であるが刀法についてその重要性について熱く語っているのは興味深い。内容から後の「篆刻指南」の元になったものと推察できる。

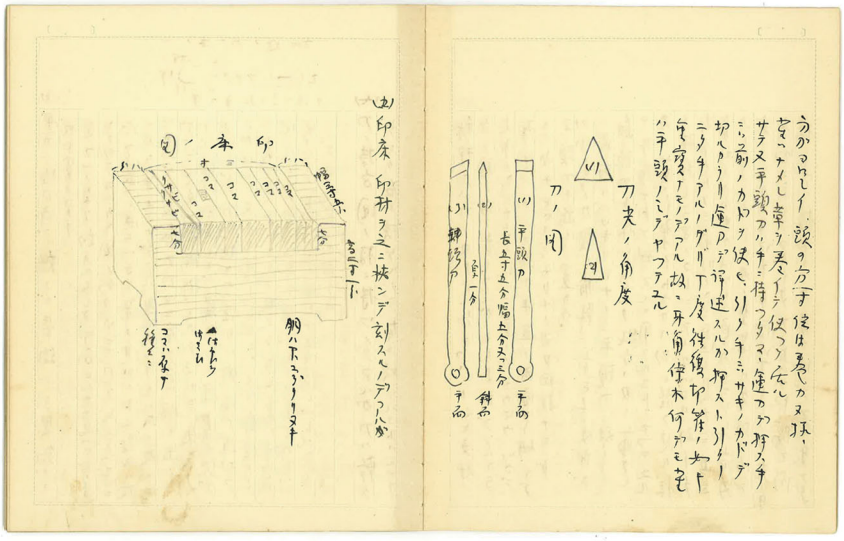
◀章法論考比較表(一部抜粋)

題名 著者 出版社 出版年月日	「篆刻鍼度」 陳目耕 北京市中国書店 1786年2月	「篆刻三法」 楠瀬日年 輪墨同好会・南有書院 1935年9月20日 金曜日	「篆刻指南」 石井雙石 柏林社書店 1968年9月25日	「書道講座⑥」 梅舒適 二玄社 1973年2月10日	「入門書道全集５」 梅舒適 実業之日本社 1973年8月1日 水曜日
1	情意	情意	字の多寡	遷謙法（漢印）	字形的統一
2	勢態	邊闌	文の朱白	増減筆画（漢印）	椰謙得法
3	邊闌	格眼	印の大小	精緻（古璽）	誇張適宜
4	格眼	空地	画の疎密	非精緻（古璽）	増減筆画
5	空地	那移	挪謙取巧		資主分明
6	弧理	増減	俯仰向勢		（回文法）
7	縦衡	重字	平方正直		
8	回文	回文	字画		
9	朱白相間文	朱白相間	疎密		
10	満白満紅文	満白満朱	肥瘦		
11	柵子文	墳書	均匀		
12	玉筋文	八分書	重文		
13	鐵線文	飛白書	粗細		
14	深細文	畳文	半白文半朱文		
15	垂脚文	柵子文	三白文一朱文		
16	急就文	玉筋文	一片渾成		
17	九畳文八畳文七畳文	鉄線文			
18	柳葉文	急就文			
19	墳書	垂脚文			
20	飛白書	柳葉文			
21	殳書	其他異文			
22	敬文				
23	八分書				
24	那移				
25	増減				
26	布置				
27	粧點				
28					









◀石井雙石「篆刻手引」自筆原稿

日本篆刻協会　審査会・展覧会予定

展覧会部長　代表理事　黒田玉洲

・第三七回日本篆刻展（二〇二一年）

審査会　四月三日（土）・四日（日）　原田の森ギャラリー三〇一・四〇一号室

飾り付け　五月一八日（火）　原田の森ギャラリー二階大展示室・四〇一号室

展　観　五月一九日（水）～二三日（日）　原田の森ギャラリー二階大展示室

・第三八回日本篆刻展（二〇二二年）

審査会　三月二六日（土）・二七日（日）　原田の森ギャラリー三〇一・四〇一号室

飾り付け　五月三一日（火）　原田の森ギャラリー二階大展示室・四〇一号室

展　観　六月一日（水）～五日（日）　原田の森ギャラリー二階大展示室

・第三七回日本篆刻展　展示計画について

本年の第三六回展は新型コロナウイルス感染症拡大により外出自粛が求められ、予定していた審査会場が審査会前日に閉館・使用不可となり、急な会場変更・予定変更と慌ただしい中ではありましたが、何とか審査会を開催し鑑別・審査結果が確定いたしました。作品集は無事発行され、郵送等ではありましたが表彰状・記念品授与も行なわれ、異例な形ではありましたが第三六回展は開催されました。しかし肝心の作品展示については会場閉鎖等により実施できず、作品集での印影のみの鑑賞とならざるを得ませんでした。

そこで、二〇二一年第三七回日本篆刻展では、本来第三六回展で展観すべきでありました特別展観『張耕源書画篆刻作品』の展示、理事以上の役員作品、各寄託賞受賞作品、上位入賞作品を併せて展示したいと計画しております。ただ、会場面積や壁面に限りがありますのでどのような形での展示になるかはこれからしっかりと案を練ってまいりたいと思っております。

二〇二一年四月の第三七回日本篆刻展審査会、五月の展覧会までには新型コロナウイルスが消滅しているのが理想ではありますが、せめてワクチン開発や治療法の確立がなされ、新型コロナウイルスが未知なるものではなく共存できる世の中となり、制約があったとしても展覧会が開催できることを願ってやみません。

会員の皆様方におかれましては、第三七回展にも素晴らしい作品を発表していただくため、新型コロナウイルス対策をしっかりとされ、ご自愛とご研鑽に励まれますことをお祈りいたしております。

第三回陳介祺賞万印楼篆刻芸術応募作品撮影会

副理事長　喜多芳邑

六月二二日、滋賀県、和田大卿氏にご協力いただき、和田邸にて、カメラマンを呼び、井谷理事長、係の喜多で写真撮影をいたしました。

五月末、中国への小包郵送が不可能な状況下、本年度出品は断念せざるを得ないかと苦慮いたしておりましたところ、陳介祺研究会より連絡が入り、日本、韓国、シンガポール、マレーシア、並びに香港、マカオ、台湾からの作品に対して作品画像による審査を実施したいとの意向でした。応募作品に対し、印屏全体の一点、印屏中の側款のある作品二点、原石一点の画像依頼でした。厳しい状況の中、七八点もの出品を頂き、完成度の高いものも多く、皆さんの力作を何とか出品したいと考え、陳介祺研究会の要請に応えるべく撮影をいたしました。画像データ整理等は和田氏に依頼し、中国への小包郵送が可能になるのを待つばかりです。

追伸：七月三日に無事中国に郵送することができましたことをご報告致します。

◀写真撮影作業の様子

【第一号ニュースレター訂正】

「三國志と漢内矣印」記事

誤「漢内」→正「關内」

以上、訂正してお詫びいたします